

令和元年度

# 春日井市財務書類

---

Financial Statements 2019



## 1 はじめに

地方公共団体における公会計制度は、現金収支に着目した単式簿記による現金主義会計を採用しています。しかし、単式簿記は、発生主義の複式簿記を採用する企業会計と比較し、過去から積み上げた資産や負債といったストック状況とともに、減価償却費や引当金といったコスト情報を把握できないことが課題となっていました。

こうした中、国は、発生主義・複式簿記に基づく「統一的な基準による地方公会計マニュアル」を平成27年1月に公表し、当該基準による財務書類等を、原則として平成28年度決算までに全ての地方公共団体において作成するよう要請しました。

本市においても、平成27年度決算までは、複式簿記の導入や固定資産台帳の整備が必要ではない簡便な作成方式の「総務省方式改訂モデル」を採用して財務書類を作成していましたが、平成28年度決算からは「統一的な基準」による財務書類等を作成し、公表しています。この「統一的な基準」の導入により、自治体間における比較分析や、固定資産台帳を整備することで、公共施設マネジメント等への活用が可能になります。

図1 単式簿記と複式簿記

単式簿記	<b>経済取引の記帳を現金の収入・支出として一面的に行う簿記手法</b>
複式簿記	<b>経済取引の記帳を借方と貸方に分けて二面的に行う簿記手法</b>

### 【現金100万円で車両を1台購入した場合】

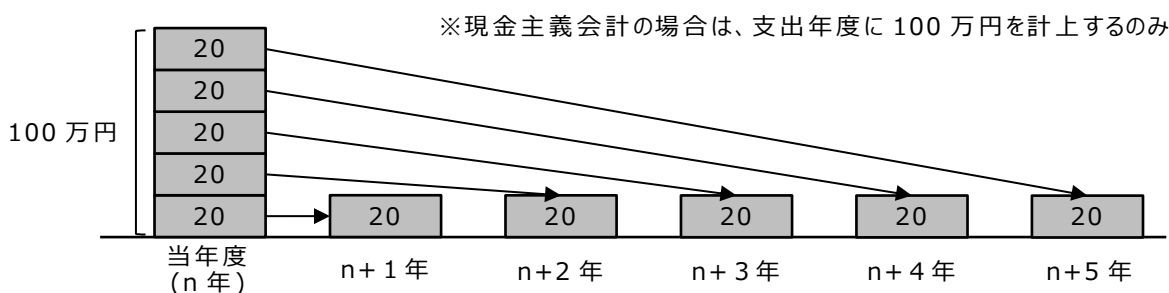
- ・単式簿記の場合は、現金支出100万円を記帳するのみ
- ・複式簿記の場合は、現金収支とともに資産の増加を記帳

資産の増加	資産の減少
(借方)車両100万円	(貸方)現金100万円

図2 現金主義会計と発生主義会計

現金主義 会計	<b>現金の収入・支出といった事実に基づき、それを記帳する考え方</b>
発生主義 会計	<b>現金の収入・支出に関わらず、取引が発生した時点で収益・費用を記帳する考え方</b> ※減価償却費や引当金など現金支出を伴わないコストを把握

### 【車両(価格100万円、耐用年数5年)の減価償却イメージ】

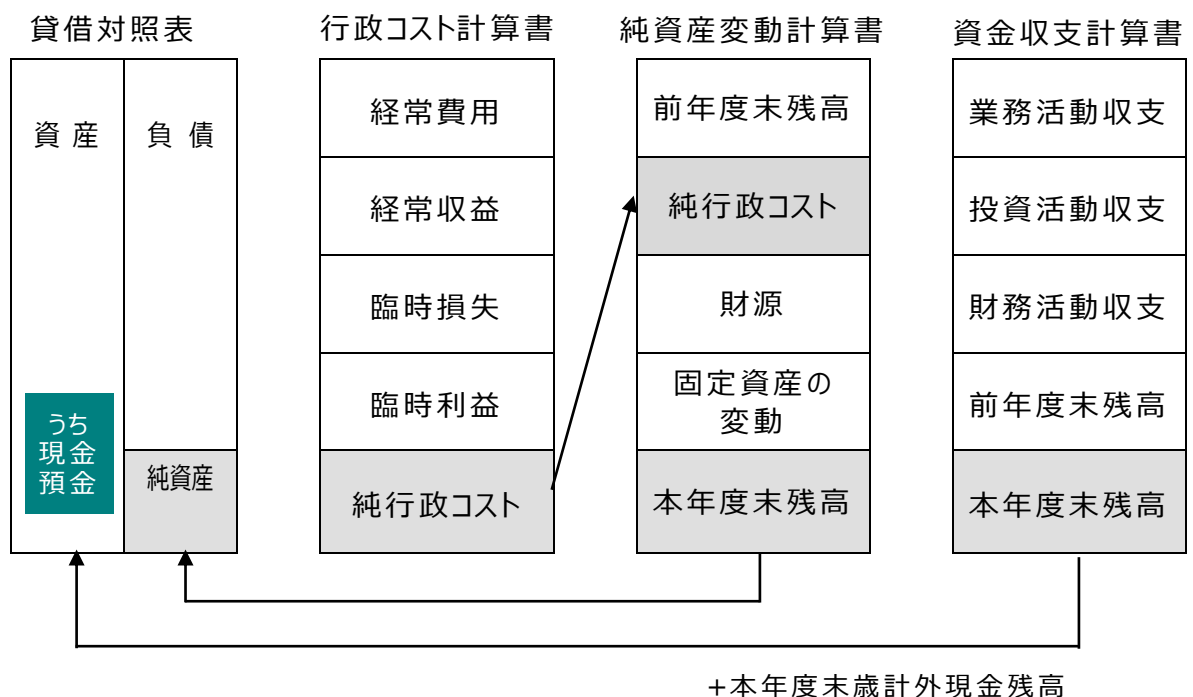


## 2 財務書類

本市の財務書類は、次の4表で構成されます。

	名 称	概 要
1	貸借対照表 (略称：BS)	基準日時点(決算日)における資産や負債などの財政状況を明らかにするもので、保有する資産や将来負担することになる負債をストック情報として総括的に表しています。
2	行政コスト計算書 (略称：PL)	1年間の行政サービス活動に伴い発生した費用と、その財源としての収益の金額の累計額を表すもので、民間企業の損益計算書に相当します。行政コスト計算書における収益は、行政サービス提供の直接的な対価として支払われる使用料や手数料が主なもので、税金や補助金は計上しません。よって、収支差引きにより算出される純行政コストは、税金などで賄うべきものの額を表しています。
3	純資産変動計算書 (略称：NW)	1年間の純資産の変動状況を表すものです。行政コスト計算書には計上されていない税金や補助金は、純行政コストを賄うべき財源として計上されています。純資産の増加は、将来に引き継がれる資産が現世代の負担により蓄積され、将来世代の負担が軽減したことを意味し、純資産の減少は、その分の負担が将来世代に先送りされたことを意味します。
4	資金収支計算書 (略称：CF)	1年間の資金の増減を明らかにするもので、資金の性質に応じて、業務活動収支・投資活動収支・財務活動収支の3つの区分に分けて表しています。

図3 財務書類の相互関係






### 3 財務書類の対象範囲

地方公共団体とその関連団体を連結して、一つの行政サービス実施主体として捉え、公的資金等によって形成された資産の状況やその財源とされた負債・純資産の状況、更には行政サービス提供に要したコストや資金収支の状況などを総合的に明らかにする必要があります。

このため、一般会計に地方公営事業会計以外の特別会計を加えた「一般会計等財務書類」、一般会計等に地方公営事業会計を加えた「全体財務書類」、さらに関連団体を加えた「連結財務書類」を作成します。

図4 財務書類の対象となる団体(会計)

春日井市		関連団体
一般会計等	地方公営事業会計	
【一般会計】 【特別会計】 ・公共用地先行取得事業 ・民家防音事業 ・潮見坂平和公園事業	【特別会計】 ・国民健康保険事業 ・後期高齢者医療事業 ・介護保険事業 ・介護サービス事業 ・大泉寺地区企業用地整備事業 【企業会計】 ・市民病院事業 ・水道事業 ・公共下水道事業	【地方三公社】 ・春日井市土地開発公社 【第三セクター等】 ・公益財団法人かすがい市民文化財団 ・公益財団法人春日井市スポーツふれあい財団 ・公益財団法人春日井市健康管理事業団 ・社会福祉法人春日井市社会福祉協議会 ・公益財団法人春日井市食育推進給食会 ・勝川開発株式会社 ・高蔵寺まちづくり株式会社 【一部事務組合】 ・尾張東部火葬場管理組合 ・春日井小牧看護専門学校管理組合 【広域連合】 ・愛知県後期高齢者医療広域連合
<b>一般会計等財務書類</b> 		
<b>全体財務書類</b> 		
<b>連結財務書類</b> 		

本書は、一般会計等の財務書類について記載しています。

#### 4 貸借対照表(令和2年3月31日現在)

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	402,952	固定負債	85,623
有形固定資産	364,346	地方債	70,345
事業用資産	193,032	長期未払金	676
土地	134,452	退職手当引当金	8,929
立木竹	0	損失補償等引当金	5,444
建物	138,754	その他	228
建物減価償却累計額	△ 86,930	流動負債	11,017
工作物	31,180	1年内償還予定地方債	7,982
工作物減価償却累計額	△ 25,272	未払金	326
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	1,088
航空機	0	預り金	1,261
航空機減価償却累計額	0	その他	361
その他	1	負債合計	96,640
その他減価償却累計額	△ 1	【純資産の部】	
建設仮勘定	848	固定資産等形成分	410,574
インフラ資産	169,423	余剰分(不足分)	△ 88,169
土地	83,511		
建物	2,301		
建物減価償却累計額	△ 1,185		
工作物	266,300		
工作物減価償却累計額	△ 181,645		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	141		
物品	6,314		
物品減価償却累計額	△ 4,422		
無形固定資産	11		
ソフトウェア	3		
その他	7		
投資その他の資産	38,595		
投資及び出資金	32,666		
有価証券	1		
出資金	32,665		
その他	0		
投資損失引当金	△ 598		
長期延滞債権	670		
長期貸付金	816		
基金	5,151		
減債基金	0		
その他	5,151		
その他	0		
徴収不能引当金	△ 110		
流動資産	16,093		
現金預金	3,443		
未収金	805		
短期貸付金	218		
基金	9,740		
財政調整基金	9,687		
減債基金	53		
棚卸資産	0		
その他	1,934		
徴収不能引当金	△ 47		
資産合計	419,045	純資産合計	322,405
		負債及び純資産合計	419,045

## 【主な項目説明】

名 称	概 要
事業用資産	学校、保育園、消防署、クリーンセンターなど、市が事業活動を行うための資産
インフラ資産	道路、公園、河川など社会生活の基盤となる資産
引当金	将来の特定の費用または損失として、金額を合理的に見積もったもの
長期延滞債権	1年以上に渡り、徴収がなされていない税金などの債権
地方債	建物の建設などのために金融機関などから借り入れた資金
純資産	資産額から負債額を控除した正味の資産額であり、税金などによりこれまでの世代が負担し、将来世代へ引き継がれる資産の残高

## 【本年度の状況について】

資産合計は約4,190億円、負債合計は約966億円、純資産合計は約3,224億円です。資産合計に占める負債合計の比率は23.1%であり、資産合計のうち約2割が将来世代の負担になっていることがわかります。

平成30年度決算と比較すると、資産合計は横ばいの一方で、負債合計は約32億円減少し、結果として純資産合計は32億円の増加となります。負債合計が減少した主な理由は、土地開発公社の経営健全化に伴い損失補償引当金が減少したことや、中期財政計画に基づき計画的に地方債の削減に努めたことによるものです。これらにより、将来世代に引き継ぐ純資産は1.0%増加しています。

5 行政コスト計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	金 額
経常費用	91,182
業務費用	48,717
人件費	16,928
職員給与費	14,609
賞与等引当金繰入額	1,088
退職手当引当金繰入額	805
その他	427
物件費等	30,552
物件費	19,563
維持補修費	1,957
減価償却費	8,989
その他	44
その他の業務費用	1,236
支払利息	0
徴収不能引当金繰入額	16
その他	1,221
移転費用	42,465
補助金等	10,409
社会保障給付	22,369
他会計への繰出金	9,315
その他	371
経常収益	8,929
使用料及び手数料	2,263
その他	6,665
純経常行政コスト	82,253
臨時損失	74
災害復旧事業費	0
資産除売却損	74
投資損失引当金繰入額	0
損失補償等引当金繰入額	0
その他	0
臨時利益	1,540
資産売却益	210
その他	1,330
純行政コスト	80,787



## 【主な項目説明】

名 称	概 要
業務費用	人件費や物件費、減価償却費など、経常的な行政活動に係る費用
移転費用	医療費助成などの社会保障給付や、他団体に対する補助金など、他の主体に交付することにより効果がある費用
純経常行政コスト	経常的な行政活動に係る費用のうち、税金などで賄うべき費用
臨時損失	災害の復旧費用など、その会計期間に臨時的に発生した費用
臨時利益	資産を売却したことによる利益など、その会計期間に臨時的に発生した収入
純行政コスト	その会計期間に臨時的に発生したものを含めた全ての費用のうち、税金などで賄うべき費用

## 【本年度の状況について】

令和元年度の1年間の純経常行政コストは約823億円、臨時に発生した利益等を踏まえると純行政コストは約808億円になります。

経常費用の内訳は、移転費用のうち社会保障給付に係るコストが最も多く、平成30年度から約9億円の増加となっています。これは、障がい者福祉に係る事業費や児童扶養手当等の増加が主な要因となっています。

業務費用の中では、物件費が平成30年度から約11億円増加しており、これは、低所得者・子育て世帯向けプレミアム付商品券の発行やふれあい農業公園のオープンに伴う指定管理料等の増加が主な要因となっています。

## 6 純資産変動計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	合計	固定資産等形成分	
		固定資産等形成分	余剰分 (不足分)
前年度末純資産残高	317,560	411,788	△ 94,228
純行政コスト(△)	80,787		80,787
財源	85,015		85,015
税収等	63,804		63,804
国県等補助金	21,211		21,211
本年度差額	4,228		4,228
固定資産の変動(内部変動)		△ 1,830	1,830
有形固定資産等の増加		6,785	△ 6,785
有形固定資産等の減少		△ 9,342	9,342
貸付金・基金等の増加		2,022	△ 2,022
貸付金・基金等の減少		△ 1,296	1,296
資産評価差額	0	0	
無償所管換等	616	616	
内部取引	0	0	
その他	0		0
本年度純資産変動額	4,844	△ 1,214	6,059
本年度末純資産残高	322,405	410,574	△ 88,169

### 【主な項目説明】

名 称	概 要
税収等	市民税や固定資産税などの地方税、国から交付される地方交付税や地方譲与税等
資産評価差額	有価証券などの評価替を行った場合の差額
無償所管換等	寄附などにより無償で取得した固定資産の評価額等

### 【本年度の状況について】

行政コスト計算書により算出された純行政コストを税収等や補助金などの財源により賄うことで、本年度差額は約42億円となっており、本年度末純資産残高は約3,224億円になります。

7 資金収支計算書(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	金 額
<b>【業務活動収支】</b>	
業務支出	80,036
業務費用支出	36,599
人件費支出	15,035
物件費等支出	21,564
支払利息支出	0
その他の支出	0
移転費用支出	43,437
補助金等支出	10,416
社会保障給付支出	22,369
他会計への繰出支出	9,315
その他の支出	1,337
業務収入	89,062
税収等収入	62,302
国県等補助金収入	20,370
使用料及び手数料収入	2,244
その他の収入	4,146
臨時支出	0
災害復旧事業費支出	0
その他の支出	0
臨時収入	0
<b>業務活動収支</b>	<b>9,026</b>
<b>【投資活動収支】</b>	
投資活動支出	9,977
公共施設等整備費支出	6,828
基金積立金支出	1,157
投資及び出資金支出	1,126
貸付金支出	865
その他の支出	0
投資活動収入	2,925
国県等補助金収入	1,145
基金取崩収入	359
貸付金元金回収収入	932
資産売却収入	490
その他の収入	0
<b>投資活動収支</b>	<b>△ 7,052</b>
<b>【財務活動収支】</b>	
財務活動支出	8,292
地方債償還支出	7,892
その他の支出	400
財務活動収入	6,359
地方債発行収入	6,359
その他の収入	0
<b>財務活動収支</b>	<b>△ 1,933</b>
本年度資金収支額	42
前年度末資金残高	2,140
本年度末資金残高	2,181
前年度末歳計外現金残高	1,149
本年度歳計外現金増減額	112
本年度末歳計外現金残高	1,261
本年度末現金預金残高	3,443

## 【主な項目説明】

名 称	概 要
業務活動収支	経常的な行政活動に伴い、継続的に発生する資金の収支
投資活動収支	建物の建設などの資本形成活動に伴い、臨時的に発生する資金の収支
財務活動収支	資金の借入やその償還など、負債の管理に係る資金の収支
歳計外現金	市営住宅の敷金など、一時的に預かっている資金

## 【本年度の状況について】

業務活動収支については、人件費や物件費等の経常的な行政サービスを提供するため、約800億円を支出した一方で、税収等の収入が約890億円あったため、約90億円の資金余剰になりました。

投資活動収支については、補助金や基金取崩の収入が約29億円あった一方で、建物の建設や改修などの資産形成のため、約100億円を支出したため、約71億円の資金不足になりました。

財務活動収支については、地方債の借入による収入が約64億円あった一方で、地方債の償還等のため約83億円を支出したため、約19億円の資金不足になりました。

## 8 財務書類からわかる各種指標

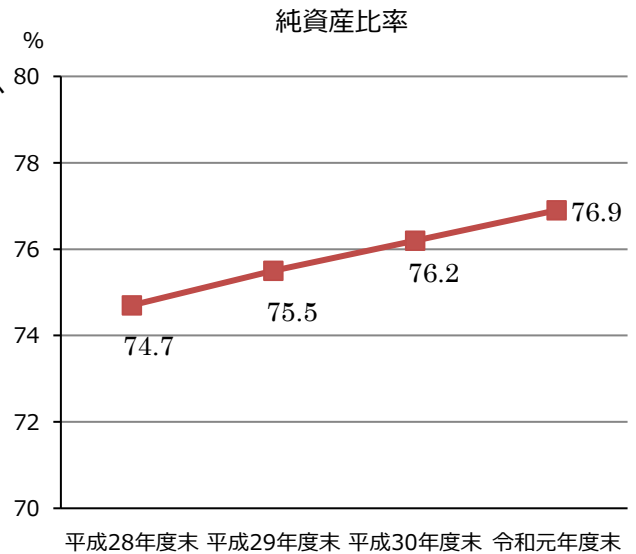
### 純資産比率 76.9%

地方公共団体は、地方債の発行を通じて、将来世代と現世代の負担の配分を行います。従って、純資産の変動は、将来世代と現世代との間で負担の割合が変動したことを意味します。

例えば、純資産の減少は、現世代が将来世代にとっても利用可能であった資源を消費して便益を享受する一方で、将来世代に負担が先送りされたことを意味します。逆に、純資産の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用可能な資源を蓄積したことを意味します。

【算出式】

純資産合計 ÷ 資産合計

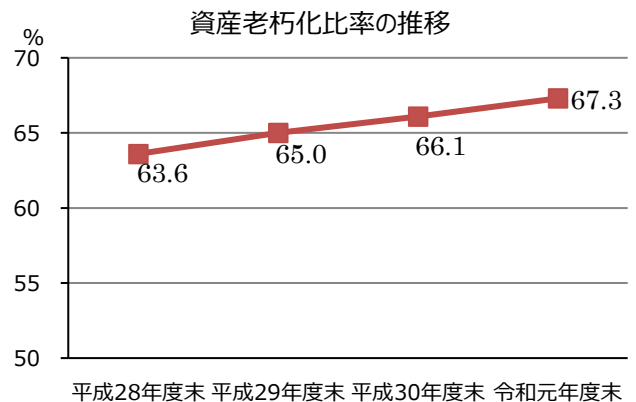


### 資産老朽化比率 67.3%

有形固定資産のうち、償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合を算出することによって、耐用年数に対して資産の取得から、どの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

【算出式】

減価償却累計額 ÷  
(有形固定資産(償却資産)+減価償却累計額)



### 将来世代負担比率 13.2%

社会資本等について将来の償還等が必要な負債による形成割合を算出することによって、社会資本等形成に係る将来世代の負担の比重を把握することができます。

【算出式】

地方債残高(特例地方債を除く) ÷  
有形・無形固定資産合

